躍動する「人文学類」へ

同一は変化を，変化は同一を否応なく求める

ギリシャの哲学者，ヘラクレイトスは「人は同じ川に二度と入ることはできない」と言ったそうですが，確かに<同じ水分子の集合>に人は二度と遭遇することはなくとも，昨日と<同じ>犀川に足をつけることはできそうです．つまり，ある意味で今日の犀川は昨日と<同じ>犀川であるのですが，<同じ>川であるためには，刻々と違った水分子の集合を必要とするわけです．

さて，平成20年4月から，文学部だけでなく，法学部，経済学部，それに教育学部が一つにまとまって人間社会学域を形成し，文学部は人文学類として新たに生まれ変わりました．それだけでなく，人間社会学域には，新しく国際学類と地域創造学類が誕生し，これまでの金沢大学文系の学部体制では十分に学ぶことのできなかった研究領域を集中的に学ぶことができるようになりました．

これは，大学が社会や学生のみなさんのニーズに対応し，大きくその姿を変化させた結果です．しかし，一方で現代社会の要請に迅速に応えることができるためには，大学は，人類の歴史や地球という大きな時空間のスケールで大学という<同じ何か>であり続けなければなりません．変化は同一を，そして同一は変化を互いに必要とするのです．

そこで，人文学類とは何であるかを，あえて<変わらぬ側面>から述べてみましょう．あるいはむしろ，人文学類にとって<変わってはいけないもの>と言うべきかもしれません．それは，ちょっと大げさに言えば，自由と真理と表現という人間の本質を高く掲げ，それをいついかなる時にでも守り抜こうとすることです．それは，ともすれば目先の利益と結びつきやすい技術や制度や効率性といった手段的価値を目的価値と決して混同しないこと，そして願わくば，人間が存在する限り永遠に求めてやまない知識・芸術・思想を自分たちの手でさらに一歩前進させることにほかなりません．われわれ人文学類に学ぶ者は，他の学類にもまして，恐れることなくこう言いたいのです．われわれのすべての活動は人間のこの本質のために存在する，と．

金沢大学人文学類長
柴田　正良